

演題番号：D14

新入り猫に関連した葛藤行動にミルタザピンを使用した猫の1例

○中野あや

動物行動クリニックなかの

1. はじめに：猫の単頭飼育家庭に子猫を迎えた際に、子猫が先住猫を追いかけて、先住猫が逃避行動や攻撃行動を呈するようになることがある。猫同士の攻撃行動の治療では、被害猫と飼主の安全確保を優先し、系統的脱感作や拮抗条件づけ等の行動修正法が実施される。また、被害猫への薬物療法ではSSRI等のセロトニン系抗うつ薬が第一選択となる。ミルタザピンは、猫での抗不安作用の報告はないが、社会的行動変化の報告や、その薬理作用機序からノルアドレナリン作用増強による意欲の増大が期待される薬剤である。今回、新入り猫に対して生じた威嚇を伴う葛藤行動の治療にミルタザピンを使用して良好な経過を得たため、その適応や有用性を検討した。

2. 材料および方法：症例は雑種猫、4歳齢、避妊雌。約3カ月前に雌の新入り猫(メイ)を2カ月齢で迎え、約1カ月前からメイが症例猫を追いかけるようになった。その後、症例猫がリビングに入れなくなり、メイを見て威嚇し続けるようになり受診。行動学的聴取と動画による行動観察から、威嚇行動を恐怖性攻撃行動と葛藤時の転位行動と診断。行動修正法と α カソゼピンによる食餌療法にて治療を開始し、初診後

32日目よりミルタザピン(1.25 mg/cat, sid)を開始した。

3. 結果：症例猫は初診から15日目にはリビングに入れるようになり、32日目にはリビングに滞在するようになったが緊張が強く、メイの接近から逃げる行動が続いていた。ミルタザピン開始後4日目(初診から36日)にリビングで寛ぐようになり、メイの接近に対して逃げずに留まるようになった。53日目までにメイの近くで寛ぎ、関心を示すようになる等、良好な経過をたどっている。

4. 考察および結語：症例猫はミルタザピンの併用により、人や場所等の資源への意欲が増え、逃走せずに意思表示できるようになったと思われた。ミルタザピンには過活動や興奮的作用があるため、投薬によって攻撃衝動を惹起しないよう慎重な行動観察が必要であった。また、食欲増進作用は、症例猫においては拮抗条件づけの促進に有用であったが、食事管理の徹底が難しく、体重増加によるリスクを考えると、より低用量からの使用を検討すべきかもしれない。不安行動への効果や、行動変容が早くて食欲低下がない等、飼主の心的負担も軽減でき、猫の不安や葛藤行動の治療薬として選択肢の一つになるかもしれない。